

## 建築のメディア環境から、 建築と社会の関係を考える

山崎 泰寛

環境建築デザイン学科

2016年10月1日付で環境科学部に着任いたしました。私はこれまで建築のメディアに関わってきた、商業的な雑誌・書籍の編集や、大学の広報・ブランディング業務を中心に実務経験を積む中で、歴史研究にのめり込んできました。

仕事の中で日を追うごとに実感していったのが、日本の建築のメディア環境の特殊さです。建築という領域では、アカデミックな学術雑誌はもちろんのこと、建築作品や評論を掲載する専門誌が独特の影響を持ち、ときには学会を揺るがすような問題提起が繰り返されることもあります。ここでは、そのような建築のメディア環境について筆を進めたいと思います。

### メディア環境の変化

私が仕事を始めた2000年代初頭は、『SD』や『建築文化』、『10+1』といった特色ある専門誌のいくつかが休刊し（奇抜な建築特集を組んでいたサブカル誌の『STUDIO VOICE』も休刊した）、代わりに『Casa BRUTUS』や『Pen』のように建築をライフスタイルの一貫として取り上げる雑誌が登場し、『Vogue Japan』や『Numero Tokyo』といったファッション誌でも建築特集が生まれ始めた時期でした。

日本の建築業界はもともと、学術雑誌とは別に複数の雑誌メディアが並び立ち、工学、芸術、商業の間を縫うように専門的な領域として自立してきた経緯がありました。町に日々生み出される建築物もまた、歴史の一部として評価される運命にあります。ゆえに、建築という分野は、アカデミズムとは別に、建築作品を評価する専門的な雑誌メディア群が大きな影響力を持ってきました。

それを支えてきたのが、大学をはじめとする教育機関において専門家として養成された人材です。メディアのつくり手も書き手も、そして読み手も、多くは彼らの中から生まれてきました。それゆえに強固な言説ジャンルとなってきたともいえますが、裏返せば、ものが分かっている人同士のコミュニケーションに陥りかねず、いつ自家中毒を起こさないと

も限らない。そんな危うさもあるのが日本の建築メディアだったと私は考えています。

また、この時期は、1995年の阪神・淡路大震災や2005年の構造計算書偽装事件を経て、建築物に対する「安心・安全」の要請が高まっていた時期でもありました。建築業界は、市民からの問いに必ずしも応えきれていなかったようにも思います。

結果的に、小難しい解説文が載った専門雑誌はニーズを失い、分かりやすさとスピード重視の雑誌群（今ならウェブメディアも含まれる）の時代が到来します。こと商業媒体においては、作品と批評が入り混じった建築メディアの世界から、専門誌が得意とした批評の場が失われ、作品カタログとニュースを載せる業界誌と、わかりやすく大衆化した一般誌に住み分けが始まった——。2000年代以降のメディア環境は、そのように理解できます。

### 展覧会という「環境」

この時期に専門教育を終えて社会に出た若者の中には、焦りを抱いた人もいました。やっと社会に出てこれからというときに、商業的な媒体では議論する場所がすでに失われてしまったのではないかと、そんな喪失感と焦りを抱いた建築関係者も少なからずいました。私もその一人です。その状況を逆手に取り、有志で勉強会を開き、出版社に勤務する仕事の傍らで友人たちと自主メディアを製作し、世代もジャンルも横断したレクチャーイベントを開催して議論を深めようと思いました。

プロの編集者として誌面をつくり、あるいは執筆者として活動していると、そのようなメディアの状況そのものに疑問を持ち、足元から見直してみたいと考えるようになりました。なぜ建築のメディア環境はこのような状況にあるのだろうか？ 建築はメディアを通じて社会とどのように切り結んでいるのだろうか？

そんなじりじりとした思いを抱きながら建築雑誌の編集記者を続けていた私は、2008年のある日、東京国立近代美術館で建築展の記者会見に参加していました。そこで聞いたキュレーターの発言に衝撃

を受けたのです。曰く「この展覧会は、本美術館での5つめの建築展です」。

東京国立近代美術館は第二次世界大戦後の占領が終わった1952年に開館しています。ということは、60年近い歴史を持つ美術館で、それも絵画や彫刻、写真、映像といった近代の芸術を一手に扱う国立の美術館で、これまでたったの4回しか建築展が開かれてこなかったのか？建築が自らのメディア環境に自閉する中で、展覧会という公共的なプレゼンテーションの場から完全に拒否されているではないか。私は驚きました。

建築展は、絵画や写真の展覧会とは決定的に異なる側面があります。それは、ホンモノは展示されえないということです。完成した建築作品そのものは展示できません。実物を敷地から引き剥がすことができないからです。建築は、自然や歴史を含む総合的かつ固有の環境のもとで成立する、単品生産の作品です。ゆえに建築展では、模型や写真、図面、テキストといった二次的な情報をメディアとして集積して展覧会を構成するのが一般的です。一言で言えば、建築展とはメディア環境なのです。

ここで私は、雑誌メディアに対するもやもやした思いは、雑誌メディアにではなく建築のメディア環境そのものに起因していると思い至りました。言うまでもなく、写真もテキストも誰かが作成したもので、さらにそれらを誰かが意図的に編集します。誌面を構成すれば雑誌に、空間を構成すれば展覧会が生まれます。

そこには折々の社会情勢や、どの作品をどんな理論で推していくのかという戦略が多かれ少なかれ反映されているはずです。裏返せば、展覧会を建築メディアの総合体として分析すれば、そのねらいに遡って建築を論ずることができるのではないか。建築史が扱いきれていない、必ずしも建築家や建築作品を中心としない建築史が書けるのではないか。私はそう考えました。

そこで私は、ニューヨーク近代美術館 (MoMA) で1950年代に開かれた展覧会に注目し、学術論文を書き始めました。当時のMoMAは占領期を経て日本の芸術を取り上げた展覧会をいくつも開催していたからです。その中から、書院造 (大津市にある園城寺光浄院客殿) のうつしをパビリオンとして建設した建築展と、日本建築をアメリカ市民に紹介するために各都市を巡回する写真展、そしてMoMA

がコレクションしたプロダクトデザインを東京に持ち込んで展示したデザイン展を取り上げて、展覧会の企画の成り立ちから展示物の選定、展示、評価という一連の流れを分析しました。

結果的に、戦後の日米関係の中で日本人とアメリカ人の間に生じた建築・デザイン像のずれの相貌に注目し、モダンデザインの潮流に必死に乗ろうとする日本人の思惑と、あくまでもでき上がった作品のクオリティで評価しようとするキュレーターの判断の間に生じた葛藤が見えてきました。建築展というメディア環境の中で、日本(人)の建築が自らのデザインの方向性を模索する姿が浮き彫りになりました。建築展が空間化された言説であるとするれば、あらゆる建築展を同様に分析していくことが可能です。今は国外から日本建築に向けられたまなざしに注目しています。

## 建築と社会の関係を考える

さて、1950年代以後の展覧会で重要なものの1つが、1966年に松屋銀座で開かれた「空間から環境へ」展です。主催者はその名も「エンパイラメントの会」。サブタイトルが「絵画+彫刻+写真+デザイン+建築+音楽・展」と付けられたように、ジャンルを横断して出展者が集められました。

「環境」をタイトルに決定したのは準備委員で評論家の瀧口修造で、建築家としては磯崎新と原広司、アーティストは高松次郎、宮脇愛子、山口勝弘、音楽家の一柳慧、デザイナーの栗津潔、田中一光、永井一正、写真家の東松照明ら計38名もの錚々たる面々が集結したグループ展です。

新しい工業素材をマテリアルとし、色彩豊かな有機的フォルムを持つ作品群。ジャンルを超えた場を「環境」と呼び、インテリアデザインなどさらに別のジャンルに飛び火したと指摘されています。いわば、人びとの暮らしや芸術的知性を取り巻くメディアの総体を「環境」と呼び、若い美術家やデザイナー、建築家が作品を提供したのです。

ここで注目したいのは、松屋銀座という展示会場です。日本の百貨店は戦前より住宅展や家具展などの会場となってきましたが、松屋銀座は、1953年以後「グッドデザイン・コーナー」という名称で工業デザイン製品の特別な販売スペースを持っていました。ここには、柳宗理や渡辺力、剣持勇、浜口ミホといったデザイナーのみならず、岡本太郎や石元

泰博、丹下健三といった芸術各界の若手が「デザインコミッティー」として集い、議論し、厳選した「作品」が集められ商品として販売されていました。「空間から環境へ」展は、まさに人びとの暮らしの環境を充実させようとするデザイン作品群のすぐ横で開かれていたのです。

1960年代の建築界といえば、「京都会館」（1960年、前川國男）や「国立代々木競技場」（1964年、丹下健三）を始めとするモダニズム建築の傑作が建てられるとともに、1962年に東京大学に都市工学科が設立され、浅田孝が田村明とともに「環境開発センター」を展開し、経済成長を支える都市計画が必要とされはじめた時期でもあります。人びとの日常に彩りを与える「作品」だけではなく、それらを支える社会や文化の総体を「環境」として捉え、語り始めた時代だったのかもしれません。

1966年当時に展示された「環境」と2017年の私たちの「環境」は地続きです。それは、さらに先の未来へとつながっているはずで、雑誌や展覧会といったメディアの内部に自閉せずに、建築のメディア環境を日々思考することが、建築と社会の未来を思考することでもあると私は考えています。